

■公開フォーラム：世界文化遺産テオティワカンの現状と保存

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2014年1月27日（月）、国立民族学博物館第4セミナー室において、「公開フォーラム：世界文化遺産テオティワカンの現状と保存」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

本フォーラムは、メキシコ中央高原に位置する世界文化遺産テオティワカンをめぐる最新の研究成果をはじめ、今後の調査計画や保存活動に関する講演を聴くことができるまたとない機会であり、それらの議論に関するディスカッションに参加できるということもあって、事前のアナウンスが開催日の直前におこなわれたにもかかわらず、当日の一般参加者は28名と盛況であった。

発表者は、発表順に杉山三郎（愛知県立大学）とセルヒオ・ゴメス（メキシコ国立人類学歴史学研究所）で、関雄二（国立民族学博物館）が司会およびコメンテーターをつとめた。

テオティワカンは、世界文化遺産にも登録されている大都市遺跡であり、メソアメリカにおける文明形成を論じるうえで極めて重要な遺跡である。杉山氏は、このテオティワカン遺跡で継続的に発掘調査をおこなっており、これまでに複数の主要建造物の調査を手掛けてきた。また、ゴメス氏は「羽毛の蛇神殿」下部で発見された古代トンネルの発掘調査を指揮している。ゴメス氏によれば、トンネルの最深部には重要な墓がある可能性が高いとされる。さらに両者は共同で、「羽毛の蛇神殿」の修復・保存活動を計画中である。

本フォーラムではまず、杉山氏によって、これまでのテオティワカン研究の歴史とその成果、とくにテオティワカンの都市構造や社会構造、あるいは権力性などに関わる発表がおこなわれた。同時に今後の課題も報告された。次に、ゴメス氏は本邦初公開となる最新の発掘調査の成果と、今後の修復・保存活動計画についての発表をおこなった。そして最後に、関氏の司会進行のもとテオティワカン遺跡をめぐる学術的研究にとどまらず、その保存・修復活動や文化遺産、それらを取り巻く研究者および専門家以外の人々のあり方までいたる包括的な討論が繰り広げられた。

以下は、各発表と総合討論の概要である。

・「テオティワカン研究史」杉山三郎

本発表では、テオティワカンに関する研究史について、杉山氏による調査をふまえた報告がなされ、これまでの研究成果と今後の課題が示された。

具体的には、「太陽のピラミッド」、「月のピラミッド」、「羽毛の蛇神殿」といったテオティワカンにおける主要大規模建造物の発掘調査成果、とくに建造物の建設過程や建設活動と関わる儀礼的奉納や生贄に関するデータが報告された。また、これらのデータを元に、テオティワカンの権力者像や、都市国家における祭祀的側面が論じられた。今後の課題として、テオティワカンの成立や展開についてマヤ地域を含む周辺地域社会との関連で明らかにすることがあげられた。そして最後に、現状の研究課題を明らかにしていくうえで、ゴメス氏の調査の重要性と今後の可能性が指摘された。

・「テオティワカンの考古学的近況とモニュメント保存問題」セルヒオ・ゴメス

本発表では、現在おこなわれている「羽毛の蛇神殿」下部で発見された古代トンネルをめぐる詳細な発掘調査成果と、現在計画中の保存・修復活動についての報告がなされた。

テオティワカンでは、マヤ地域で見られるような神殿（ピラミッド）内部に設置された王墓など、重要人物の墓は未確認である。しかし、都市の主要建造物から権力者と考えられる人物の埋葬が検出されることは、テオティワカンの成立やその後の展開を論じる際に、極めて重要である。こうして現在、神殿下の古代トンネル発掘が実施され、重要な埋葬があると考えられる神殿中央部まであと一步のところ

まで調査が進んできた。その結果、これまでに神殿下の空間がたびたび儀礼に用いられ、様々な希少財も奉納されていたことが明らかになってきている。本発表では、これらのデータと「羽毛の蛇神殿」を中心とした空間が、多くの人々が参加したテオティワカンの権力性と関わる儀礼空間として用いられたという新たな解釈が提示された。そして、こうした複雑な儀礼や神殿の位置づけを明らかにしていくことが、テオティワカンの統治機構や権力の源泉などを論じていく際に重要であることが指摘された。

最後には、今後の具体的な保存・修復計画が示され、計画の実現のためには経済面などで多くの問題があり、様々な協力が必要であることが述べられた。

・「総合討論」司会：関雄二

総合討論では、テオティワカンにおける主要建造物（ピラミッド）間の関係や、それらと暦との関係、あるいはトンネルでおこなわれたとされる儀礼の詳細と権力性との関係、「羽毛の蛇神殿」をめぐる解釈や、テオティワカンとマヤ諸社会との関係など、両発表者にフロアから多くの質問が投げかけられた。そして、テオティワカンの社会的側面のさらなる解明に向けて、今後の課題と展望が述べられた。

また、学術的な内容だけでなく、現在抱えている大きな問題の一つとして、テオティワカンの保存・修復計画の進め方や、その際の考古学者の責任などについても討論が繰り広げられた。そして、これらの計画を進めていくためには、今後もメキシコと日本との間で相互交流と協力が必要であること、さらに研究者や専門家だけではなく、個々人それぞれが文化遺産について考えていく必要があることが述べられた。

(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)

協力：古代アメリカ学会